

『資本論』とは？

『資本論』(しほんろん、独: Das Kapital、英: Capital : a critique of political economy) は、カール・マルクス(Karl Heinrich Marx, 1818年5月5日～1883年3月14日、満64歳没)の主著。サブタイトルは「経済学批判(a critique of political economy)」。

全3巻(全3部)で構成されるが、マルクスの生前に刊行されたのは、1867年に刊行された第1巻(第1部)のみ。第2巻(第2部)、第3巻(第3部)はマルクスの死後、マルクスの遺稿をもとに、盟友のフリードリヒ・エンゲルス(Friedrich Engels, 1820年11月28日 - 1895年8月5日)の編集により、第2巻(第2部)は1885年に、第3巻(第3部)は1894年に刊行された。

なお「第4部」となる予定だった古典派経済学の学説批判に関するマルクスの遺稿の部分は、エンゲルスの死後、カール・カウツキーによって編集・刊行されたが、『資本論』第4部としてではなく『剰余価値学説史』(3巻4分冊)の書名で刊行された。これにはカウツキーの「独自の見解」なども含まれているとされている。

マルクスは1867年の第1巻(第1部)の刊行後も改訂に改訂を重ね、そのため、第2部と第3部の作業は大幅に遅れ、生前に刊行できなかった。マルクス自身が「まったく別個の科学的価値を持つ」と述べた自信作の改訂版である「フランス語版」も刊行された。

なお現在でも、マルクスの遺稿を基に新たな編集作業が「マルクス＝エンゲルス財団」により国際的に続けられている。

『資本論』はそのサブタイトルに「経済学批判」とあるように、それまでの古典派経済学を批判して、資本による搾取の仕組み(剰余価値生産)や資本の運動とそれが形成する資本主義社会(資本制生産様式)の根本的な問題点を体系的に明らかにした著作。

その後のマルクス主義、社会主義、共産主義の運動、ロシア革命とソ連の誕生、中華人民共和国など「社会主義諸国」の誕生に大きな影響を与えた。

しかし『資本論』はあくまで資本主義の仕組みを冷静、客観的に分析したものであって、イデオロギーを前面に出したものでも、共産主義社会の具体像を描いたものではない。共産主義社会の在り方に触れた箇所はごくわずか。